

# 平成28年度 地区別父母懇談会 開催

二松學舎大学  
**父母会報**



 **菅原学長挨拶**

(ともに東京会場・九段校舎)

平成5年5月10日創刊  
平成28年10月20日発行  
(第94号)

二松學舎大学父母会  
(本部・事務局)  
東京都千代田区三番町6番地16  
二松學舎大学学生支援課

題字は  
故 観山貞廣常吉先生書



平成二十八年(2016)度二松學舎大学地区別父母懇談会が、六月十二日(土)の高松市を始めとし、七月三十一日(日)まで全国七都市(開催日程順に高松市・青森市・秋田市・宇都宮市・千代田区〔九段校舎〕・鹿児島市・新潟市)で開催されました。

地区別父母懇談会は、父母会の主要事業の一つで、今年で二十三回を数えます。大学から学長・副学長・学務局長・学部長・両学部の教員及び職員が分担して各地に赴き、父母との懇談を行いました。

懇談会の内容は大学の現況、大学の教育方針、学習状況・学生生活・就職状況等についての説明、個別相談でした。父母の関心が高かったのは、「大学の現況報告」と「学生の学習状況について」でした。

九段校舎では、キャリアセンターによる「昨今の就職環境とご家庭における支援のヒント」の講演、教職支援センター・特別講演会として、この春に本学を卒業した新任教員から教員採用試験の体験談を話していただき、好評を博しました。内容については、六ページに掲載していますので、ご一読下さい。

六月十二日(土)の香川県を皮切りに全国各地で父母懇談会が開催され、父母と大学教職員の交流が行われました。その内容を寄稿していただきました。

# 香川会場

羽田 純子

香川地区の父母懇談会は、六月十二日(日)ホテルパールガーデンにて開催されました。大学より国際政治経済学部教授高野副学長、文学部教授森野学務局長、本学職員二名に御出席いただき、五名の父母が参加されました。

懇談会では、先生方より資料に基づき大学の現況、学生の学習状況、Uターン就職や就職の状況などに対してきめ細やかな説明を聞かせて頂きました。父母からの質問にも一つ一つ丁寧に答えて頂き印象的だったのは、学生の昼食対応の説明の中で松苓会の協力のもと週二回の百円朝食、学生ランチ、食事のメニューの説明、何より職員の方々が食堂を活用しやすくする為に色々な工夫をされているお話を伺い、大学を身近に感じさせて頂きとても良い環境の中に通えている学生達は、幸せだなーと感じました。

個別面談でもゼミの先生のコメント成績表を元に、丁寧に説明して

下さりました。就職活動にもキャリアアサポートセンターでの顔が見える指導等しつかりとした支援対応もあり、就職率が伸びている事を通じているのだなと納得させて頂き早速息子に不安な事、疑問点があれば、すぐに訪ねていくようにと伝えました。息子と離れていますので、不安な事もありましたが、今回の父母会を通してとても温かいものを感じ安堵いたしました。心から感謝申し上げます。

二松學舎大学で学んだ事を心に刻み立派な社会人になるように期待しつつ、大学及び父母会の益々のご発展を心よりお祈り申し上げます。



# 青森会場

小椋 司

二松學舎大学地区別父母懇談会が六月十八日(土)に「青森市」で開催されるということで、手軽に車で移動できる範囲であったことと、大学の現状や学生の学習・生活状況等を説明していただけるということと、妻と二人で出席することにしました。

開催場所は青森県の観光拠点「アスパム」から二〇〇mほどにある「JALシティ青森」で行われました。

大学からは中山政義国際政治経済学部長、田中正樹中国文学科主任、西園隆士教学事務部長、中原敬二入試課長で対応していただきました。父母側からは四組六名が参加し、遠路「山形県」から出席された方もおりました。

懇談会では、大学側・父母側からの挨拶から始まり、西園事務部部长から大学の現況・取り組み、田中主任、中山学部長からは各学部学生の学習、生活状況等の説明と昼食を皆さんで意見交換と個人面談がありました。

特に説明の中で印象にあったことは、二松學舎大学の学生は真面目な

学生が多い、教授と学生はラインで連絡している、教員免許は学生全体の四割が取得(スゴイ)、だが正式な教員になるには二〜三年が必要、アルバイトは深夜行くと学業に支障がでる、何か悩み事があれば一人で悩まないで学生相談室に行くこと、マツコロイドならぬ漱石アンドロイド(夏目漱石のお孫さんの声で)を造ってPR等で、大変参考になりました。大学も頑張っていると感じました。

最後に、学生の少ない地区で開催していただいたことに対して感謝申し上げます。青森県、近県での地区別懇談会には参加したいと思っております。大学および父母会の益々の発展を心より祈念申し上げます。





# 秋田会場

水谷 尚子

六月十九日(日)十一時より、秋田ビューホテルにて地区別父母懇談会(宮城、山形、秋田)が開催されました。大学からは文学部 磯教授・副学長、国際政治経済学部・押野教授・学科主任、教学事務部 西園部長、中原課長の四名、そして父兄七名が出席する計十一名による懇談会となりました。

さて、私事ではありますが、息子の大学入試を終え、合格通知を受け取り、この四月に入学をしたばかりの母親です。この地区別父母懇談会の案内が届いたのは、息子が親元を離れて東京での大学生活になれた頃でしょうか、四月当初は頻繁にしていた連絡も少なくなってきた頃でした。大学ではどんなことがなされているか知りたいと思っていた頃に届いた本会のお知らせに、当日をとっても楽しみに出席しました。

西園部長の司会により会が進行されました。冒頭で、本年は創立一三九周年であり、来迎える一四〇周年記念事業の一環として「二松學舎大学大学院・大阪大学大学院による共同研究、漱石アンドロイド」の計画

がすすめられているとの話や、現在大学が取り組んでいる教育改革等の話しがなされました。これらを聴いて、改めてこの大学で子供が学べることを嬉しく思いました。

西園部長から、在籍者数や教職員数、行事予定、履修、就職状況等々について配布資料に基づく説明があり、磯教授からはグローバル化に伴う語学の必要性、留学、GPAを意識した学びについて説明がなされました。押野教授からは国際政治経済学部の説明がなされ、キャリアアセンターや教務課、学生支援課などの相談先、松苓会についても知るよい機会となりました。また、同じ大学に通う子供を持つご父兄の方とお会いするとともに、個別相談をさせていただける機会を設けてくださってことに感謝いたします。この懇談会に参加することで、息子が恵まれた環境で大学生活を送っていることを知り、安心して家路につきましました。



# 栃木会場

寺崎由美子

六月二十六日(日)栃木会場の父母懇談会が、宇都宮グランドホテルにて開催されました。大学からは菅原学長、江藤文学部長、教務課小西課長、濱野課長補佐、入試課毛塚係長にお越しいただき、茨城、栃木、静岡の三県から十九組二十一名の父母が参加されました。

初めに学長から大学の現況や創立百四十周年の記念行事として、夏目漱石の「アンドロイド」の製作中で、完成の折には小説を朗読させるという楽しいお話を伺いました。江藤教授からは、漢学教育から始まった高い国語教育によって多くの国語教員を輩出していることや高い国語力を身に付けて社会人として送り出しているという実績を伺いました。教務課からは、キャリアアセンターを、一・二年生から活用して、どのような資格取得が必要か、就活への心構えや姿勢など早くから意識して欲しいという力強いお話しもありました。

昼食を取りながらの創設者三島中洲のビデオも興味深く拝見しました。息子は国際政治専攻の四年生です。私は、学長と個人懇談をしていただ

けました。今まで本人に任せており就職も内定しておりますが、卒業までまだ安心できない点がありました。本人の成績表を見ていただきながらどういう点に気を付けて卒業に向けて過せば良いかの助言をいただけました。個々を大切にしていただけ本大学に感謝を申し上げ、父母会の盛々の御発展を祈念しております。



# 東京会場

東京地区父母懇談会が、七月三日(日)九段校舎中洲記念講堂で開催されました。当日は、菅原学長、江藤文学部長、中山国際政治経済学部長ほか、保護者面談にも担当される多くの指導教授の方々に対応していただきました。

父母会長、学長挨拶の後、各学部長より現況報告がありその後成績通知書について説明がありました。各科目の履修状況の説明を聞き、きめ細かな科目の設定により、専攻科目以外の多様な科目を履修することで学生の視野が広がるシステムとなっているように感じられました。

学校側の説明の後、リクルートキャリアの多田講師より、直近の就職環境について家庭の支援を視点とした講演を聞かせていただきました。

その後指導教授の個別面談があり、キャリアセンター長の佐藤晋教授と入試委員長の飯田准教授に対応していただきました。子供は公務員志望のため、民間企業への就職活動とは違いますが、履修状況を丁寧を確認していただき、今後の準備についてアドバイスをいただきました。先生

## 小野澤正博

方には親身に対応していただき、安心して指導をお任せできると感じました。佐藤教授からはいつでも相談に来るように言っていたいただき、子供も先日面会し、今後の学業と就職に向け刺激を受けています。先生方の誠意に触れ、学生一人一人を大切にしていたいただいと改めて感じました。



# 鹿児島会場

七月二十四日(日)、鹿児島会場の父母懇談会はJ.R九州ホテル鹿児島にて開催されました。大学からは副学長の高野和基国際政治経済学部教授、山口直孝文学部国文学科主任教授、西園隆士教学事務部長、中原敬二入試課長の四名にお越しいただきました。参加者は、鹿児島、熊本より三名でした。

先生方より大学での現況や学生生活、学習状況、就職状況等について詳しく、わかり易くお話を伺いました。我が子が一年生ということもあり、恥ずかしながらGPA制度について理解しておらず、今回懇談会に参加しなければ知るべき事柄を知らずに卒業を迎えるところでした。

また、四年生のお母様からの教育実習や就職活動、たまたま懇談会当日が試験日であった公務員試験の受験準備についてのご報告があり、身の引き締まる思いで聞かせていただきました。参加者が少ないが故、質問には深く回答していただける贅沢な時間を過ごすことができましたことに感謝いたします。

大学より遠い九州の地で父母懇談

## 孝子

会を開催してくださり、お礼申し上げますとともに、今後の大学及び父母会の益々のご発展を心よりお祈り申し上げます。



# 新潟会場

須佐いづみ

七月三十一日(日)新潟市のホテルオークラ新潟にて父母懇談会が開催されました。大学より磯副学長、国際政治経済学部押野学科主任、本学職員二名、そして父母会会長に御出席を頂き、十八名の父母が参加されました。思っていた以上の人数で少し驚き安心もしました。

大学の行事に参加するのは初めての事でしたが、大学の現況や学生の学習状況についてお話を聞き、地方での父母会という事もあり、とてもアットホームな感じをうけました。今大学では、二松學舎の知名度を上げる為に色々努力されている事も話されていました。確かに二松學舎大学と言つてすぐにわかる人はなかなかいませんが大学側、学生達の努力でいつか有名校になる事を願っています。

父母会の帰り際、同席されたお母様方三人で少しおしゃべりをしました。初対面にもかかわらず、それぞれの子供の事で話はずみとても楽しかったです。ありがとうございました。また大学の行事でお会いできるといいですね。

最後に、このような有意義で素晴らしい懇談会を開催して下さった事に感謝すると共に、二松學舎大学及び父母会の益々のご発展を心よりお祈り申し上げます。



## 父母会地区別父母懇談会アンケート 集計結果

### 1. アンケート回答者数

分 類	香川(5)	青森(6)	秋田(8)	栃木(28)	東京7/3(99)	東京7/10(128)	鹿児島(3)	新潟(24)	合計(236)
1年生の父母	1	2	0	6	19	24	1	4	57
2年生の父母	1	1	1	2	10	14	1	2	32
3年生の父母	2	0	3	3	11	24	0	4	47
4年生の父母	0	1	0	4	8	12	1	5	31
学年不明	0	0	0	1	3	1	0	1	6
合計	4	4	4	16	51	75	3	16	173

( ) 内の数字は出席者数

### 2. 父母懇談会実施項目の「有意義」回答数

項 目	香川	青森	秋田	栃木	東京 7/3	東京 7/10	鹿児島	新潟	合計
大学の現況報告	3	3	2	9	35	36	3	12	103
学生生活について	0	3	2	6	18	20	1	6	56
学生の学習状況について	1	3	3	8	30	43	2	10	100
就職状況について	1	0	1	8	22	30	2	5	69
個別相談について	3	2	3	4	4	5	0	3	24
その他	0	0	0	0	2	3	0	2	7

### 3. 父母会活動活性化要望項目

項 目	香川	青森	秋田	栃木	東京 7/3	東京 7/10	鹿児島	新潟	合計
地区別父母懇談会の実施	2	3	2	8	21	37	2	8	83
教員の海外研修助成	0	0	0	0	4	3	0	2	9
海外研修学生引率者助成	0	0	0	0	3	4	0	0	7
就職指導に対する助成	3	1	2	9	25	42	1	14	97
新入生教育に対する助成	1	0	0	0	3	4	0	3	11
課外活動団体への助成・学生顕彰など	0	0	1	1	10	14	0	2	28
大学行事への助成	1	0	0	1	13	8	0	2	25
卒業パーティーの開催	0	0	0	1	8	13	0	3	25
卒業アルバムの贈呈	0	0	2	0	6	10	0	2	20
奨学金の給付	0	1	2	5	13	15	0	4	40
父母会報の発行	2	2	1	3	5	7	0	3	23
留学生支援に関する助成	0	0	0	0	3	2	0	0	5
弔慰金・災害見舞金の支給	1	0	0	1	6	6	0	1	15



# 就職に関する講演会 (於・地区別父母懇談会東京会場)

演題 「昨今の就職環境とご家庭における支援のヒント」  
講師 株式会社リクルートキャリア  
リクナビ副編集長 多田 健一氏

今年度の地区別父母懇談会東京会場では、近年度々変更されることので多かった企業の採用スケジュール等を踏まえ、これらに学生が翻弄されることのないようにご家庭と大学の双方でご子女の支援を行うためのヒントを示すことに主眼を置き、大手就職情報ナビを運営しているリクナビから、副編集長の多田健一氏に講演をお願いしました。

大きなテーマは4つ、はじめに、「大学生を取り巻く就職環境」についてでは、実際に就職活動を経験



した学生からの声を取り上げ紹介し、女性の就職・働き方や終身雇用と転職など、時代や社会情勢で変化してきた価値観について、保護者と学生との間で生じやすい目線の違いについて説明いただきました。

続いて2017年卒業者の採用について、求人倍率の推移を示しつつ、平均では1.74倍となつている今回の数値について、その内訳は従業員1000人未満の企業が2.49倍なのに対し、1000人以上の企業は0.90倍で、なおかつ前年比0.02ポイント減少していることを示し、学生の雇用の主体が大手企業ではないものに支えられていること、また日本の構図として働き先がサービス産業にシフトしていることをお話しいただきました。

二つ目の「就職活動のスケジュール」では、2015年以降のスケジュールの変遷と、政府の示す「日本再興戦略」の内容も参照しながら、今後の見通しを解説し、現在の就職活動で学生が行う必要がある準備等の時系列を説明いただきました。

ントリーシートやWEB受験など具体例を挙げながら解説し、過密化している就職活動スケジュールの中で学生が考えるべきこと、やるべきことが増えており低学年次生のうちからの意識が大切であることをお話しいただきました。

続いて「社会で求められる力」と題し、企業側から学生に期待している事柄についてスライド投影を用いて解説していただきました。最も企業側が採用選考にあたって重視している項目が「コミュニケーション能力」であることがデータから明らかになりました。コミュニケーション能力とは具体的に何か？という疑問に対して自身の他者に対する行動等を「対人能力・対自己能力・対課題能力」に分類した「社会人の基礎力」一覧表を示しながらお答えいただきました。このような基礎力を磨くために効果があることの一例として「インターンシップ」の活用を挙げられました。

最後に「家庭でできるサポート」として、就職活動を突き詰めていくと、「自分を知ること」と「企業・仕事を知ること」の繰り返しになる、と示し、保護者として迷う事があっても成長を見守ることの大切さと、最も身近なキャリアモデルとして学生の自己認知(自己分析を深めてい



くこと)の手助けが大事であるとお話しいただきました。就職活動学生には、話を聞き一緒に考えてあげる相手が必要で、学生が就職活動を経て最終意思決定できるまでを見守ることが周囲に望まれているとまとめられました。

以上が講演の概要でございますが、本学としても、講演の中に取り上げられた「コミュニケーション能力」について同窓会組織の松苓会の助成で講座を開設するなど早い時期からの能力醸成を支援しております。またご家庭とキャリアセンターができる就活支援を実施していくため様々な行事を企画しております。引き続きキャリアセンター運営へのご理解とご協力をお願い申し上げます。

# キャリアアセスンターだより

44

## 【インターンシップ】

今年度開講しております「インターンシップ特別講座（月曜五時限開講、以下、インターン特講）」では前期を三年次生対象、後期を一年次生対象としております。

三年次生受講生については、夏期インターンシップに積極的に参加をいたしました。昨今話題になることも多いインターンシップですが、内容は様々です。

文部科学省は、「大学等におけるインターンシップは、大学等における学修と社会での経験を結びつけることで、学生の大学等における学修の深化や新たな学習意欲の喚起につながる」とともに、学生が自己の職業適性や将来設計について考える機会となり、主体的な職業選択や高い職業意識の育成が図られる。また、就職後も成長し続けられる人材の育成につながる。「ことを趣旨としており、採用活動とは一線を画するものとしております。しかしながら、企業のインターンシップ実施数が前年比四割増と言われる中で、学生の企業研究の延長上から一部の企業では採用選考に密接に関わるケースもあ

ると言われております。キャリアアセスンターといたしましては、参加学生がそれぞれ内容を吟味して応募するよう注意喚起を行っております。

本学で行っているインターン特講では、受講生の職業意識向上を図るため、実業界に触れる体験を提供しその事前準備をサポートしています。今月三日には、受講生が運営主体となつて受入機関の方々をお招きし、成果報告会も開かれました。

後期は、十月三十一日から一年次生対象の内容で月曜日の五限に開講予定です。どうぞ時間割上受講が可能となつていれば、ご子女に追加をお勧めくださいますようお願いいたします。来年度の三年次生用の講座も、より内容を充実させて参りますのでよろしくお願いいたします。



季節の移り変わりの速さを、身を持って感じられる今日この頃です。季節どころではありません。一年がとても短く感じられます。人生の先輩たちが、「歳をとると一年が早い」と話していたことを思い出します。

四年に一度のスポーツの祭典「オリンピック」を見ながら、メダルの数や色に一喜一憂していたのは二カ月前の夏の事です。その後は、週に一度は台風と格闘し、築地の偽装問題が連日テレビに取り上げられました

が、その話題ですら忘れ去られようとしています。そして気付けばあつという間に今年が終わろうとしています。四月に入学・進級した学生の皆さんも、次の事を考える時期となりました。

二年生はゼミが決まり、三年生は就職活動を視野に置き、四年生は楽しい学生生活最後の春休みの前の大きなハードル、卒論に悪戦苦闘中の事でしょう。

お子さんが小さい頃は、色んな夢を見せてくれませんでしたか？早くから英語が言えた・絵を描く

と次々と賞状をもらう・スポーツは何をやらせてもレギュラーで大活躍。親としては、将来を楽しみにしていたのではないのでしょうか。

我が家の息子が、小学二年生で少年野球に入つてすぐに「将来は巨人軍に入団してお母さんに大きな家を買ってあげる」と言つて私を喜ばせてくれました。高校に入る頃聞いてみたところ、覚えてないという答えでした。

オリピックでは、十代の選手の活躍が話題となりました。お子さんが今後大物になる夢は捨てないとしても、今は学生生活を実りある時間にして欲しいと思います。

大学生生活の四年間は、あつという間でもあり長いとも感じる事でしょう。お子さんが、急に元気がなくなつたり食欲がなかったりしたら、それは何かのサインかもしれません。気がかりな状態であれば「相談室」を進めてください。親御さんからも受け付けております。お電話でも受け付けます。重篤な状態になる前に。

学
生
相
談
室

だ
よ
り
94

カウンセラー・教授 白石まりも

# 牧角ゼミナール

中国文学②ゼミナール。通称牧角ゼミでは、中国文学における詩の歴史を跡付けるため、歴代の詩人やその代表作を中心として取り上げ、これらを元に中国詩史を学んでいます。牧角ゼミには現在、四年生が十四人、三年生が七人在籍しており、程良い男女比率で構成されています。総勢二十一人という大所帯ながらも決して個性が埋もれることはなく、勝気・照れ屋・スケベ等々、バラエ

ティに富んだ面々が揃っています。そんな個性豊かなゼミ生を統治するのは、我がが誇る“牧角悦子”教授です。母のような包容力と少女のような無邪気さを兼ね備え、いつも優しく、時には厳しくご指導いただいています。私達も愛して止みません。これらのゼミ生が毎回白熱した議論を繰り広げ、漠然とした疑問を明らかにし理解を深めていくプロセスはなんとも筆舌に尽くし難い爽快感があります。毎年夏期休暇には合宿期間が設

けられ、自身の専攻テーマに基づいた研究発表や、卒業論文に向けての構想をシェアし、議論を交わし合います。合宿の魅力はこれだけに非ず、教授・ゼミ生全員を巻き込んだ大宴会もあり、先輩・後輩同士での密な関係を持つ絶好のチャンスでもあります。勿論合宿以外にも年間を通しての交流は多くあり、他の追従を許さないほどの和気あいあいつぶりです。堅実な研究内容とは打って変わったフレンドリーな環境も、当ゼミの特徴の一つかもしれません。「学問」「娯楽」双方に対し貪欲



中国文学科 四年 春口智紀

な意識を持ち、上下関係の垣根を越えて意見を述べられるような人形を成を指すことが、当ゼミのモットーです。

# 稲田ゼミナール

私たちのゼミナールでは、稲田篤信先生のご指導のもと、曲亭馬琴『南総里見八犬伝』の読解研究をしています。三年次春 semester ターでは資料や映画から作品に触れ、基礎知識を得ます。秋 semester からは作品を場面ごとに区切り、週ごとに二人一組で発表を行っていくようになります。発表者は場面のあらすじ、口語訳、そして担当箇所からトピックスを決め、それについて考察をします。

四年次では、これらの作業を一人で行うようになります。発表後にはゼミ生全員がコメントをしますが、疑問や意見を投げかけるなど互いに良い影響を与えています。また、三年次のゼミ合宿は八犬伝ゆかりの地である南房総で行うのが恒例となっています。八犬伝はフィクションではありますが、南房総には貴重な資料が多く保管してある博物館や伏姫籠穴をはじめとする八犬伝にちなんだ場所がいくつもあり、実際に訪れると作

品をよりリアルに感じることができ

ます。現在は大学四年間の集大成として各自卒業研究に奮闘している日々ですが、担当の稲田先生のご指導も穏やかなお人柄や、時にはユーモアを交えながらのお話が私たちゼミ生の憩いのひとときとなっています。国文学科 四年 武田瑛莉子



## ゼミ探訪







教職支援センター 教授

小淵 朝男

人生、長く生きれば生きるほど忙しくなる。そんなことを授業で学生に語ることがある。そうした多忙感の始まりはやはり学生時代だったように思う。

大学合格後、3月末に上京して入寮手続きをしていたら、入室勧誘兼サークル勧誘を兼ねた上級生が、入る部屋が決まっていなかったなら「ぐみに



国際政治経済学部 教授

本多 峰子

自分の学生時代を振り返ると、まず、「たのしかった〜！」との印象がよみがえる。高校まではいろいろな科目があり、中にはほとんど興味もなく、ただ出席してテストを受けていたものもある。けれども、大学生になってからは、自分の好きな科目を選択し、自主的に好きなテーマを見つけてレポートを書き、それだけ

の会」の部屋にしませんか？と声をかけてくる。寮は同好会やサークル毎に部屋割りのようなものがあり、他にも勧誘兼入室斡旋をしているサークルもあった。「ぐみの会」の説明を一通り聞いた私は温和そうな先輩の人柄もあり、その「ぐみ」部屋で寮生活を始めた。それは同時に、多忙な学生生活の始まりでもあった。

「ぐみの会」は学生セツルメントのサークルであり、寮には他にも川崎セツル、氷川下セツル等の部屋もあった。日本における学生セ

に没頭することが許された一例外として体育があったが(50メートル走の測定係によれば何千人もの学生の中で私は一番遅かったらしい)——とにかく楽しかった。

私の専攻は英米文学だったから、英語の勉強をしてどんどんいろいろなものを読めるようになるのもうれしかった。それに、授業でも小説を読んだり、英米演劇演習の授業では、映画のビデオ(「ロミオとジュリエット」、「ハムレット」、「セールのスマンの死」など)を見たり…。大学に「勉強に行く」というのが

# 私の学生時代

ツルメントについて説明すると長くなるので省略するが、私が大学に入った70年代後半期の学生セツルメントは主に土曜日等に「地域」に出かけていき、公園等で幼児や小学生と遊んだり、中学生や高校生と勉強会をしたり、法学部や医学・看護系の学生であれば法律相談や医療相談等を行ったりしていた。時には、子どもたちと廃品回収を行って、その資金を使って夏休みに子どもたちと

キャンプに出かけた。サークルだけでも忙しくなりつつあったのに、徹夜麻雀したり、まじめ

ちよつとおかしいくらいな気がした。映画を見るのが「勉強」だなんて。原書翻訳を問わずに好きな本を読むだけではなく、新大久保にできたシェイクスピア劇場(グ

roup座)の安い天井敷チケツトを買って見に行ったり、小説の映画化があると友達と見に行ったりして、それが全部勉強だった。ああ、英文科の学生って何ていいのだろうと、自分でも思っていた。大学というのは、自分の好きなことを好きなだけ学び、たくさん深く学ぶほど高く評価してもらえる、考

に勉強しようと思案内で読書会始めた。さらに、大学内の別のサークル(大学内に花を植えたりする園芸サークル)に入ったりして、結局、退部したり自然消滅したり等々の日々となっていた。

疾風怒濤の学生時代を送ってしまった、少しは身を入れて勉強しようかな？という思いもあって大学院に進んではみたが、忙しさは増すばかり。「人生これでよかったのか」と迷いつつ、定年後に「ゆとり」を期待しているが、さて期待通りになるのかどうか。

えようによつては一生で一度きりの天国のようなどころである。その天国が好きで、ここ10年くらいはまた、別の大学院に通っていたりもした。50歳を過ぎて若い学生と一緒に定期試験を受けたり、成績を気にしたりしながら、でもやっぱり楽しかった。いい加減にもう、学生生活はやらないうらうと思うが、いま現

役学生の二松學舎の皆さまと大学生活の楽しさを分かち合えるときはやはりうれしい。皆さまが将来、私みたいに「学生時代、楽しかった」と言ってくれたらいいな、と思う。

# 中国語学研修 報告

今年で第十九回目を迎えた中国語・歴史文化研修は、八月七日から八月二十七日の三週間の日程で行われた。文学部、国際政治経済学部から計十七名（男子八名・女子九名）の学生が参加し、出発時を戸内俊介准教授、帰国時を張佩茹専任講師が引率した。

研修先は、本学の協定校である北京大学歴史学系。本研修をはじめ、毎年交換留学生や教職員相互派遣などが行われ、非常に良好な交流関係を築いている。研修では、午前中に中国語の授業があり、ベテラン講師による少人数制の会話中心の実践的な授業が行われ、日本では身に付きにくいリスニングと会話の能力をブラッシュアップできる内容になっている。午後は補講や中国の歴史文化講座が開催され、市内見学で見学する名所旧跡の歴史

的背景や見学のポイントなどを学んだ後に、万里の長城や京劇などを自分の目で見て体験することができるプログラムとなっている。

参加学生の中には、海外が初めての学生も多く、最初は言葉や習慣の違いに戸惑う様子も見られたが、授業で学んだ中国語を駆使し、積極的に現地の人々と交流を図っていた。

この三週間の海外研修は、参加学生にとって、中国語の習得だけでなく、「異文化」と「多様性」への理解を深め、グローバル感覚を養う良い機会になったに違いない。

本学では毎年十一月、協定校（中国・台湾）への長期留学の派遣留学審査会が行われる。毎年、研修参加者からの応募があり、実際に長期留学を実現させている学生もいる。グローバル人材の必要性が叫ばれる今こそ、より多くの学生からの応募を期待している。

（国際交流センター 石川 静香）



## 日本人の学びの姿勢

国文学科三年

永由 香華

頃は八月。旧暦なのか中国での季節は秋です。中秋節に向けて黄色やら紫やら色とりどりの月餅が並んでいます。初めて降り立った北京は東京と変わらないように見えました。周りには漢字が並び、アジア人で溢れた北京首都国際空港は、すんなりと私たちを迎え入れてくれました。その印象は街に出ても同じでした。「死なずに帰れ」と送り出されて「(为什麼?)と先生に笑われたことは言うまでもありませんが)びくびく怯えながらやってきた国とは思えません。さて、日本での授業と圧倒的に違うのは、会話の多さです。英語教育でも同じことが言えますが、日本では主に書くことが中心です。綴りや文法を忠実に覚えるところから始まります。しかし、中国ではとにかく自分の話をしなければ授業が進みません。「テキストの問題はわかるけれど先生が何を言っているのかはわからない」といった声は多く、教職志望の私にとっては考えさせられる課題でした。終盤は幾分か会話に慣れてきたと思うのですが、先生の最後の感想は、「日本人はあまり話さない。辞書を引いたり書いたりするばかり。」というもので、冗談半

分におっしゃってはいいたものの、期待に答えられていないことを反省させられました。帰国後に二松學舎大学比較文学・文化専攻の永井鉄郎先生にうかがったところ、「日本人はまず日中(英)辞典ではなく中(英)日辞典から使えと習うが、海外は逆である」とおっしゃっていました。日本人が相手は何を伝えたいか読み取ることを優先する一方で、外国人はまず自分をどう伝えるかを優先するということです。その考え方の違いは非常に興味深いものでした。

今回の留学で、そうした疑問を見つけられたことは大きな収穫になりました。疑問を自覚し、背景を探ることは日本を知る上で大切なことだと思います。外を知ることには中を知ることであると身を以て実感できた二十日間でした。近い将来、また北京に行き、再び抱えきれないほどの書籍と共に新たな疑問を持ち帰りたいと思います。

最後に、お世話になりました先生方、職員の皆さま方、それから二十日間を共に過ごした仲間たちに感謝したいと思います。ありがとうございました。



# 海外研修 報告

## 大学のブランド戦略の最先端を目の当りに

文学部教授 塩沢一平

写真を見て下さい。変身のポーズではありません。調査したザビエル(Xavier)大学の頭文字X(エックス)を腕で作ったのポーズングです。(右端が塩沢)

平成二十八年八月二十九日〜九月五日まで、大学経営戦略研究所の米国調査研修に同行しました。今回は私のダブルメジャーである大学マーケティング戦略の調査として、大学のブランド戦略や高等教育への人工知能導入の最新線などを調査しました。

オハイオ州シンシナティにあるザビエル大学では、大学のブランド戦略と、関連する大学の総合的なマーケティング戦略についてトム・ヘイズ教授(元全米マーケティング協会会長)からレクチャーを受けました。

象徴的な話はブランドのマークについてでした。トヨタやマクドナルドのように、ブランドは誰でもがその機能を知っており、そのマークが浮かび、どんな会社でがそれを知っているものでなければならぬのです。ザビエル大学では、徹底的な調

査をもとに、他の機能と差別化できる「Learning, Serving, Achieving, TOGETHER(共に学び・奉仕し・成功しよう)」という標語とXのマークを掲げてブランド定着に務めていきます。

先のポーズングを含め、学内にXのブランドマークが溢れています。学食の紙ナプキンの入れ物やバレーのネットの上部までにもXのマークが入っていました。学生達も誇らしげにXマーク入りのTシャツを着ている姿も印象的でした。

ブランドディングを始めとする米国で得た知見を、学内の改革前進に還元できるよう努力したいと改めて考えました。この機会を与えて下さった父母会に感謝申し上げます。



## 「第九回国際古漢語語法研討会」に参加して

文学部准教授 戸内俊介

平成二十八年七月二十八日から八月二日にかけて、ドイツのベルリンを訪れた。目的は、「第九回国際古漢語語法研討会」で研究発表を行うためである。

本学会は古代中国語文法研究唯一の国際学会である。一九九四年に第一回が開かれて以降、二〜三年に一度、会場校を変えつつ、定期的に行われており、二〇一六年で九回目となる。今回の会場校はフンボルト大学。かの有名な言語学者ヴィルヘルム・フォン・フンボルトによって創立された、ドイツの名門大学である。

参加者は、ドイツを始め、中国、台湾、香港、アメリカ、フランス、日本などからおよそ七十名程度。発言語は中国語或いは英語である。

古代中国語文法研究、という馴染みのない方が多かろうと思う。簡単に言えば、中国語がかつてどのような言語であったか、また現代までのように変化してきたかを、古代の漢字資料―甲骨文などの出土文献や『論語』『史記』などの伝世文献―を用いて研究する学問である。

中国ではそれなりにメジャーな学問分野であるが、日本人で従事する

者は少ない。事実、今回の日本人参加者は私と私の恩師の二人のみであった。

私の発表内容は、殷代甲骨文の否定詞「弗」と「不」の機能的差異に關してのものである。中国語による口頭発表なので、苦勞も多いが、得るところも少なくなかった。今後は論文として仕上げていきたい。

今回は会場がヨーロッパであったため、費用面等を考えれば、本来参加は難しかったと思う。しかし、父母会の助成金のおかげで、貴重な機会を得ることができた。心より感謝申し上げます。





**二松學舎大学父母会成長支援型  
(資格・能力取得育英)  
奨学金の募集**

父母会では、平成二十六年度より公務員試験等合格者や父母会が指定した資格取得者を対象とした奨学金制度を設け、勉学環境支援を行っています。今年度も父母会成長支援型(資格・能力取得育英)奨学生を募集しますので、左記の試験に合格した学生のご父母の皆様は、お子様にお声かけください。ご応募お待ちしております。応募書類は、学生支援課で十月二十四日から配布します。

**応募資格** 本学に在籍する学部生  
で、左記のいずれかに該当するもの

- ①公立学校教員採用試験合格者
- ②公務員試験合格者
- ③父母会が指定した資格の取得者

(平成二十七年十一月二十日)  
平成二十八年十一月十七日に  
取得したもの)

**応募期間** 平成二十八年十一月七  
日～十一月十八日

詳細は、父母会ホームページを  
ご覧ください。

**父母会から**

**卒業アルバムを**

**贈呈します**

卒業記念品として学校生活の思い出が  
つまった卒業アルバムを、父母会から贈呈  
します。

つきましては、左記のとおり卒業  
アルバム用の写真撮影を実施しま  
す。特に個人撮影については、この  
機会を逃すと卒業アルバム記載され  
ないこととなります。(名前のみの  
記載になります)

是非ご撮影下さいます様、お声を  
かけて下さい。

**★撮影期間**

十一月七日(月)～十一日(金)  
十二月七日(水)～九日(金)

**★撮影時間**

十二時～十七時(全日)

**★撮影場所(九段校舎)**

個人写真：地下二階学生ホール  
ゼミナール写真：一階正面入口階  
段前(雨天時は地下二階学生ホール)

※ゼミナールに所属している学生  
は、ゼミナール集合写真を撮影し  
ます。ゼミナール写真は、ゼミ毎  
に指定された日時に撮影します。  
詳しくは、学内の掲示でお知らせ

します。

※やむを得ない事情により、右記日  
程で個人写真を撮影できない場合  
は、各自で撮影された写真を掲載  
致します。縦4cm×横4cmの写真  
を学生支援課へご提示ください。  
写真提出は、窓口・郵送のどちら  
でも構いません。提出の際は、写真  
裏面に必ず学生番号・氏名をご記入  
ください。

なお、郵送の場合は「二松学舎大  
学学生支援課 卒業アルバム係」宛  
でお送りください。

**お詫び**

「二松学舎大学父母会報第九三  
号(二〇一六年七月三十一日発行)  
十二ページの「ゼミ探訪 田中ゼ  
ミナール」の記事に誤りがありま  
した。

- ・上から二段目二行目  
誤 「彼らの思考の営みを追従  
することなしに、」  
正 「彼らの思考の営みを追蹤  
することなしに、」

・二段目最終行  
誤 「白文のもと、」  
正 「白文のものと、」  
読者の皆様ならびに執筆者の桜  
井亮介さんにご迷惑をおかけした  
ことを深くお詫び申し上げます。

**編集後記**

リオデジャネイロオリンピック・  
パラリンピックでは、たくさんの感  
動と勇気を頂きました。次の東京オ  
リンピックに向かって社会が動いて  
いるのを感じる今日この頃です。一  
・二年次生が卒業する頃には社会や  
経済がますます変化しているかもし  
れません。

父母会は、毎夏実施している地区  
別父母懇談会や奨学金制度(毎年検  
討・見直し)などを通して、学生の  
応援団として共に歩んでいこうとし  
ております。

また、「ゼミ探訪」で紹介されて  
おりますように、二松学舎大学で  
は、多方向から深く考える力を学  
び、多様な表現力ができる基礎をつ  
くっていただいています。その積み  
重ねが、社会に出た時に強い発信力  
になるように父母会や周りの皆様で  
見守り、共に歩んでいきたいです  
ね。

十一月二十六日(土)には、国際  
交流センター主催の「外国人留学生  
スピーチコンテスト」が九段キャン  
パスで行われます。留学生の日ご  
ろの勉強の成果を是非ご覧ください。  
ご来場お待ちしております。